

## 論 文

# パーリ語における *añc-* をめぐって

真宗文化研究所 平成26年度研究員

稲 葉 維 摩

### ・はじめに

*añc-* (pres. *áca-ti/te*, *añca-ti/te*) は「曲げる」、「(水を) 汲む」を意味する<sup>1</sup>。パーリ語にも *añc-* に由来すると考えられる語がある。しかし、語形やテキストの読み、意味には大きな揺れが見られ、様々な解釈が生じる。このことは文献の伝承にも関わる問題であるが、これまで詳しく分析されて来なかった。本稿では、パーリ語経律において *añc-* に関わる語である *añca-ti*, *añcha-ti*, *samañca-ti*, *sa (m) mūñj-*<sup>2</sup> をめぐって考察する。

### ・ *añca-ti*, *añcha-ti*

(1) b. *añcāmi* (ind.1.sg.) は「引く、引っ張る」を表しており、「曲げる」、「(水を) 汲む」と異なる。文脈の関係から、先立つ詩節とともに引用する。

(1) a. Th 749 *antovāṅkagato āsiṃ maccho va ghasam āmisaṃ / baddho mahindapāsenā vepacity āsuro yathā*// 「私は内向きの釣り針によって到達されている。魚が餌を飲み込んでいる時のように。マヒンダパーサによってアスラであるヴェーパチティが縛られているように」。

b. 750 *añcāmi*<sup>3</sup> *naṃ na muñcāmi asmā sokapariddavā / ko me bandhaṃ muñcaṃ loke sambodhiṃ vedayissati*// 「私はそれ(内向きの釣り針)<sup>4</sup>を引っ張っており、放していない。この苦悩と嘆

きから。世間において誰が私に束縛の解放を、即ち正覚を教えるのだろうか。】。

Cone (2001: s.v. “*añcati* 1”) は *añca-ti* を「(水を) 汲む」の意味で登録しているが、(1) b. の状況に合わなくなるため、*añcāmi* に対して異読 *añchāmi* (Cone 2001: s.v. “*añchati*” 「引く」) を採用する。

*añcha-ti* 「引く、引っ張る」の例として (2) a. がある。その註釈 b. には両手両足の間に皮を挿んで引っ張る様子が描かれている。

- (2) a. D II 291 (= M I 56<sup>5</sup>) *seyyathā pi bhikkhave dakkho bhamakāro vā bhamakārantevāsī vā dīghaṃ vā añchanto dīghaṃ añchāmī<sup>6</sup> ti pajānāti rassaṃ vā añchanto rassaṃ añchāmī ti pajānāti evam eva kho bhikkhave bhikkhu dīghaṃ vā assasanto dīghaṃ assasāmī ti pajānāti. dīghaṃ vā passasanto dīghaṃ passasāmī ti pajānāti. . . .* 「それは例えば、比丘達よ、巧みなろくろ工、或いはろくろ工の弟子が長く引っ張っている時、『私は長く引っ張っている』と考える、或いは短く引っ張っている時、『私は短く引っ張っている』と考えるように、全く同様に、比丘達よ、比丘は長く息を吸い込んでいる時、『長く息を吸い込んでいる』と理解し、或いは長く息を吐き出している時、『長く息を吐き出している』と理解するのだ。…」。
- b. Sv III 764 *dīghaṃ vā añchanto ti mahantānaṃ bherīpokkharādīnaṃ likhanakāle hatthe ca pāde ca pasāretvā dīghaṃ kaḍḍhanto. rassaṃ vā añchanto ti khuddakānaṃ dantasūcivedhakādīnaṃ lekhanakāle mandamandaṃ rassaṃ kaḍḍhanto.* 「『長く引っ張っている時』というのは、大きな太鼓の革などを引き裂く際に、両手と両足を伸ばして後、長く引っ張っている時。『短く引っ張っている時』というのは、小さい、歯や針による穴などを持つ〔革〕を引き裂く

際に、とてもゆっくりに短く引っ張っている時」。

CPD (s.v. “*añchati*”), Cone (2001: s.v. “*añchati*”) によれば、*añcha-ti* は Skt. *añch-*<sup>7</sup> 「引く、引っ張る」に由来する。ところで、Geiger (1916: §40, 62) には非語源的に有気音、或いは無気音が現れる事例があげられている。一例として、*siṅghāṭaka-* (Skt. *śṛṅgāṭaka-*), *pipphalī-* (Skt. *pippalī-*), *lodda-* (Skt. *lodhra-*, *rodhra-*), *babbu-* (Skt. *babhru-*) など。従って、Pā. *añcha-ti* < *añc-* 或いは Pā. *añca-ti* < *añch-* どちらの可能性もありうることになる。

意味の点で Hoffmann (1965 = 1975) は「(水を) 汲む」が「腕を (身体側へ) 曲げる」に基づくことを指摘する<sup>8</sup>。この考え方によれば、(1) b. における *añcāmi* 「引っ張る」の意味は「腕を身体側へ曲げる」に由来するものと考えられるだろうか。

*ud-añc-* 「水を汲む」の派生語である *udañcanī-* 「水汲み容器」は Ja に一回のみ知られる。

- (3) Ja I 417 v. 105 *sukhaṃ vata maṇṇī jīvantaṃ pacamānā udañcanī / cori jāyappavādena telam loṇaṇ ca yācati* // 「ああ、楽に私は生活しているのに、調理している時<sup>9</sup>、水汲み容器として<sup>10</sup>、盗賊女は妻という主張によって、ごま油や塩を請う」。

・ *sam-añca-ti*

*sam añc-* 「曲げる」は身体の一部について言われる<sup>11</sup>。ここでは後の考察に関わるヴェーダ文献の一例をあげる。

- (4) ŚB 8.1.4.7 *āthātaḥ samañcanaprasāraṇāsya evā / sām̐citam hatke samañcanaprasāraṇéna ity abhīmṛṣanti. paśúr eṣā yád agnīr. yadā vā paśúr āngāni sām̐ ca āñcati prá ca sārāyaty ātha sá tair vīryam karoti.* 「そこで、ここからは他ならぬ屈伸についてである。まとめて積み上

げられたものに、ある者達は、屈伸を伴ってと言って触れる。次のものが犠牲獣である、即ち火である。犠牲獣が肢体達を曲げ、伸ばす時、その時、それ（犠牲獣）はそれらによって力強さを作っているのだ」；‘Now, then, as to the contraction and expansion (of the body). Now some cause the built (altar) in this way to be possessed of (the power of) contraction and expansion : that Agni indeed is an animal ; and when an animal contracts and expands its limbs, it develops strength by them.’ (Eggeling 1897 : 20 f.)

- (5) JB 2.407 (408) *tasmād idaṃ bāhuṃ sam ca āñcati pra ca sārāyati*.  
「それ故、この腕を曲げ、伸ばす」。

パーリ語の例 (6), (7) a. では、向こうからブツダがやって来る所を見て、病気の比丘が寝台から身体を起こそうとしている状況が描かれる。これら二例は人物名が異なるけれども同文である。しかし、問題の語には (6) *samañcopi*, (7) a. *samañco pi* という相違がある。(7) b. は a. の註釈である。

- (6) S IV 46 (2x) *addasā kho so bhikkhu bhagavantaṃ dūrato va āgacchantaṃ. disvāna mañcake samañcopi*.<sup>12</sup> *atha kho bhagavā tam bhikkhum etad avoca. alam bhikkhu. mā tvam mañcake samañcopi*.<sup>13</sup> 「かの比丘は見たのだ、世尊が他ならぬ遠くからやって来ているのを。見て後、寝台の上で？した。その時、世尊はかの比丘に次のことを言ったのだ。『十分だ、比丘よ。君は寝台の上で？するのをやめよ。これらの席が準備されている。そこに私は坐ろう』と」。

- (7) a. A III 379 (2x) *addasā kho āyasmā phagguno bhagavantaṃ dūrato ’va āgacchantaṃ. disvā mañcake samañco pi*.<sup>14</sup> *atha kho . . . alaṃ*

*phagguṇa. mā tvaṃ mañcake samañco pi. . .*

- b. Mp III 393 *samañco pī*<sup>15</sup> *ti utṭhānākāraṃ dassesi*. 「立ち上がる様子を彼は示した」。

一方、注に示した異読にある通り、問題の読みは *samadhosi* と揺れる。(6), (7) と同じ状況を伝える (8), (9) では *samadhosi* が採用されており、異読に *samañcopi* があげられる。

- (8) S III 120 (2x) *addasā kho āyasmā vakkali bhagavantaṃ dūrato āgacchantaṃ. disvāna mañcake samadhosi*.<sup>16</sup> . . . *alaṃ vakkali. mā tvaṃ mañcake samadhosi*. . . 「長寿なる者ヴァッカリは見たのだ、世尊が遠くからやって来ているのを。見て後、寝台の上で〔身体を〕揺すった。…『十分だ、ヴァッカリよ。君は寝台の上で〔身体を〕揺するな。…』」。

- (9) S III 125 (2x) *addasā kho āyasmā assaji bhagavantaṃ dūrato āgacchantaṃ. disvāna mañcake samadhosi*.<sup>17</sup> . . . *alaṃ assaji. mā tvaṃ mañcake samadhosi*. . .

*samadhosi* は *dhū-* (*dhūno-ti*) 「振る、揺さぶる」の [*s-*] aor. \**sam-a-dho-s-* と考えられるだろう<sup>18</sup>。ブツダを向かえるために起き上がろうとして、寝台の上で身体を揺するという状況が想定される。(8) の註釈である (10) では聖典の読みとして、*samacopi* (aor., *cup-* 「動く」<sup>19</sup>) の読みがあげられているが、異読も多い。

- (10) Spk II 313 *mañcake samacopī*<sup>20</sup> *ti samantato acopi*.<sup>21</sup> *calanākārena apacitīṃ dassesi. yuttaṃ*<sup>22</sup> *kir' etaṃ bāḷhagilānena pi buḍḍhataṃ disvā utṭhānākārena apaciti dassetabbā. tena pana mā calī mā calī ti*

vattabbo. 「*mañcake samacopi* というのは、あらゆる側に動いた。動き回る様子によって、敬意を示した。言われている<sup>23</sup> そうだ。病気が激しくなっている者によっても、年長者を見て後は、立ち上がる様子によって敬意が示されるべきである。けれども彼（ブツダ）によって『動き回るな。動き回るな』と言われうる」。

註釈 (7) b., (10) によれば、敬意を表すために寝台の上で身体を起こそうとして動いている場面が読み取れる。いずれの語形によってもそのような状況を表すことは可能である。

(11) a. では、比丘の道具であるニシーダナが問題となっている。その註釈 b. も含めて、ここでは「引っ張る」という状況が描かれている。註釈 b. は *samañchati* の読みを示す。従って、ここには (1), (2) と同様の解釈の可能性が生じるだろう。

(11) a. Vin IV 171<sup>24</sup> *tena kho pana samayena āyasmā udāyi mahākāyo hoti. so bhagavato purato nisīdanaṃ paññāpetvā samantato samañcamāno nisīdati. atha kho bhagavā āyasmantaṃ udāyiṃ etad avoca. kissa tvaṃ udāyi nisīdanaṃ samantato samañcasi seyyathā pi purāṇāsikoṭṭho ti. tathā hi pana bhante bhagavatā bhikkhūnaṃ atikhuddakaṃ nisīdanaṃ anuññātan ti.* 「けれどもその時、長寿なる方、ウダーイは大きな身体を持つ者となったのだ／大きな身体を持つウダーイがいたのだ。彼は世尊の前に、ニシーダナを準備した後、あらゆる側に引き延ばしながら坐っていた。そこで世尊は長寿なる方、ウダーイに次のことを言ったのだ。『どうして君は、ウダーイよ、ニシーダナをあらゆる側に引き延ばしているのか。それは例えば、古い剣の貯蔵庫？（鞘？）のようである』と。『しかし、というのもそのように、尊き君、世尊によって比丘達の過度に小さいニシーダナが許可されたからです』と」。

- b. Sp IV 884 *seyyathā pi purāṇāsikoṭṭho ti yathā nāma purāṇacammakaro ti attho. yathā hi cammakāro cammaṃ vitthataṃ karissāmī ti ito c' ito ca samañchati*<sup>25</sup> *kaḍḍhati evaṃ so pi taṃ nisīdanaṃ*. 「昔の皮職人という意味である。というのも、皮職人は『皮を広げられたようにしよう』と考えて、あちらこちらに引き延ばす、即ち引っ張るように、同様に彼もそのニシーダナを〔引き延ばした〕」。

・ *sa(m) mīñj-*

*sa(m) mīñj-* は「(腕を) 曲げる」を意味し、常に *pasāraya-ti* (caus., *pra-sṛ-*) 「伸ばす」とともに用いられる。特に (12) は、ブツダや神々などが瞬時にたやすく長距離を移動する様子を描く、有名な比喩である<sup>26</sup>。後の考察のために、テキストに示されている異読を注に引用した。

- (12) D I 222 (II 37, 40, 46<sup>27</sup>, 47, 50, 89, 181<sup>28</sup>, 240, 254, 264 ; M II 79<sup>29</sup>, III 300 ; S I 26<sup>30</sup>, 137, 139, 141, 142, 144, 145, 155, 227 (2x), III 91, IV 269<sup>31</sup>, V 167<sup>32</sup>, 185<sup>33</sup>, 232<sup>34</sup>, 294<sup>35</sup>, 366<sup>36</sup> ; A I 64, II 21<sup>37</sup>, III 332<sup>38</sup>, 334, 374<sup>39</sup>, 375, IV 75<sup>40</sup>, 78, 85, 162<sup>41</sup>, 163, 229<sup>42</sup>, 232<sup>43</sup> ; Ud 22<sup>44</sup>, 23, 26 (2x), 90 ; Mil 82, 106 ; Vin I 5, 105 (2x), 182, 183, 214, 215, 230, 291, II 302) *atha kho so kevaddha bhikkhu seyathā pi nāma balavā puriso sammīñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ sammīñjeyya evam eva brahmaloke antarahito mama purato pāturahosi*. 「その時、かの、ケーヴァッダよ、比丘は、例えば力持ちの男が曲げられた腕を伸ばすように、或いは伸ばされた腕を曲げるように、全く同様に、梵天界において消え、私の前に現れたのだ」。

- (13) S IV 171 (2x) *hatthesu bhikkhave sati ādānanikkhepanaṃ paññāyati. pādesu sati abhikkamapatikkamo paññāyati. pabbesu sati sammīñjana-*

*pasāraṇam*<sup>45</sup> *paññāyati. kucchismiṃ sati jighacchā pipāsā paññāyati.*  
 「両手が、比丘達よ、存在する時に<sup>46</sup>、取ることと離すことが知られる。両足が存在する時に、向かうことと戻ることが知られる。諸々の関節が存在する時に、屈伸が知られる。腹が存在する時に、飢え、渴きが知られる」。

次の数例では、伸ばしたり曲げたりする箇所が明示されていない。

- (14) Sn 193 *caraṃ vā yadi vā tiṭṭhaṃ nisinno uda vā sayam / sammiñjeti*<sup>47</sup>  
*pasāreti esā kāyassa iñjanā* // 「歩き回っている時、或い立っている時、坐っている時、或いはまた坐っている時、曲げ、伸ばす。それが身体の動きである」。
- (15) It 120 v (= A II 15 v<sup>48</sup>~Mvu III 422 v) *yataṃ care yataṃ tiṭṭhe yataṃ acche yataṃ saye / yataṃ sammiñjaye*<sup>49</sup> *bhikkhu yatam enaṃ pasāraye*  
 // 「努力しつつ、歩き回るべきである。努力しつつ立っているべきである。努力しつつ、留まるべきである。努力しつつ、横たわるべきである。努力しつつ、比丘は曲げるべきである。努力しつつ、それ(曲げた部分)を伸ばすべきである」。
- (16) D I 70 (II 292<sup>50</sup>; M III 3, 35<sup>51</sup> *ahosiṃ*, 90, 135; S IV 211<sup>52</sup>, V 142<sup>53</sup>; A V 206<sup>54</sup>; Nidd I 491) *kathañ ca mahārāja bhikkhu satisampajāññena samannāgato hoti. idha mahārāja bhikkhu abhikkante paṭikkante sampajānakārī hoti. ālokite vilokite sampajānakārī hoti. sammiñjite pasārite sampajānakārī hoti. . .* 「どのように、大王よ、比丘は記憶と正しい理解を伴った者となるのか。ここに、大王よ、比丘は向かっている時も戻っている時も正しい理解をする者となる。見ている時も見渡している時も正しい理解をする者となる。曲げている時も伸

ばしている時も正しい理解をする者となる。…」。

以上の例に付した異読から、*sa(m)miñj-* の読みには *-mm-* ～ *-m-*, *-iñj-* ～ *-ñc-* ～ *-añc-* ～ *-añch-* ～ *-iñch-* という揺れの存在が確認される。実際、M では *samiñj-* の読みが採用されている。

(17) M I 57<sup>55</sup> (181, 269, 274, 346) *puna ca param bhikkhave bhikkhu abhikkante paṭikkante sampajānakārī hoti. ālokite vilokite sampajānakārī hoti. samiñjite pasārite sampajānakārī hoti. . .* 「～(16)」。

(18) M I 168 (252, 255, 326, 458) *seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya evam . . .* 「～(12)」。

(19) M I 460 *evan te abhikkamitabbaṃ. evan te paṭikkamitabbaṃ. evan te āloketabbaṃ. evan te viloketabbaṃ. evan te samiñjitabbaṃ. evan te pasāretabbaṃ. . .* 「このように君達は向かうべきである。このように君達は戻るべきである。このように君達は見るべきである。このように君達は見渡すべきである。このように君達は曲げるべきである。このように君達は伸ばすべきである…」。

*sa(m)miñj-* の語源について、Leumann (1903 = 1998) は Kern に従う形で \**samvrñja-ti* (*sam-vrj-*) に由来するとし、BHSD (s.v. “*sammīñjayati*”) もその説を妥当とする。しかし Leumann (ibid.) 自身が言うように、そのような語形は実際には確認されない。また、BHSD は BHS *unmiñjita-*, *unmiñja-*, *nimiñjita-* に基づき、*samiñj-* は *sammiñj-* の誤りであるとする。しかし *unmiñjita-*, *unmiñja-*, *nimiñjita-* は *ud-majj-* 「浮き上がる」、*ni-majj-* 「沈み込む」に由来する語であるため<sup>56</sup>、*sa(m)miñj-* とは関係しない。

*sa(m)mīñj-, pasāraya-ti* 「(身体の一部を) 曲げ、伸ばす」という表現は、先にあげたヴェーダ文献の例 (4), (5) *sam añc-, pra-sāraya-ti* と全く一致する。このことを踏まえれば、パーリ語 *sa(m)mīñj-* は *sam añc-* に由来するという理解が最も妥当である。すでに Oldenberg (1881 = 1967 : 1172) がこのことに気づいていた。

それ故、*sam añc-* > *sa(m)mīñj-* は音韻変化によって説明される。*majjā-* > *Pā. mīñjā-* などの母音の口蓋化<sup>57</sup>、*nighaṇtu-* > *Pā. nighaṇḍu-, hánta* > *Pā. handa* などの無声音の有声音化<sup>58</sup> が起きている。(12) – (17) の異読に見られる *-īñj-* ~ *-iñc-* ~ *-añc-* ~ *-añch-* ~ *-iñch-* の揺れはこれらの変化の範囲内に収まる。*sam°* ~ *samm°* については、*Pā. nagara-* ~ *naṃgara-, nāga-* ~ *nāṃga-, uḷumpa-* (Skt. *uḍupa-*) などの鼻音化が起きたものと考えられる。さらに鼻音化はスリランカの伝承の特徴としてもしばしば指摘される<sup>59</sup>。問題の語も (12) – (17) の異読を見れば、傾向としてミャンマー写本の伝承が *sam°* の読みをよく示している。言い換えれば、*samm°* は基本的にスリランカ写本の読みである<sup>60</sup>。

さらに、*sa(m)mīñj-* の語幹について考察する。*añc-* はヴェーダ文献において *-a-* 現在語幹を作るが、*caus.* は知られない。しかし先にあげたパーリ語の例 (14), (15) には *caus. sammīñjaya-ti, sammīñje-ti* が確認される。これらの相違はどのように考えるべきか。PED では *-a-* 語幹 “*sammīñjati*” が問題の語の見出しとして登録されているが、そもそもパーリ語経律に現れる動詞語形を集めれば (20) にあげるものが見つかり、この中で *-a-* 語幹が想定されうるものは、実のところ *opt. sa(m)mīñjeyya* のみである。

- (20) *sammīñjeti* (ind.3.sg.), *sammīñjaye* (opt.3.sg.), *sammīñjeyya, samīñjeyya* (opt.3.sg.)

ところが、その *sa(m)mīñjeyya* によっても *-a-* 語幹の存在は確定されない。なぜならば、*-aya-, -e-* 語幹<sup>61</sup> の *opt.* も同様の形を持つからである。例えば、

パーリ語における *añc-* をめぐって

*kāreyya* (*kr-*), *viññāpeyya* (*vi-jñā-*), *deseyyam* (*dis-*) などである。従って問題の語に関しても、明確な語幹としては *-aya-*, *-e-* に限られているため、*sa(m) miñjeyya* も *-aya-*, *-e-* 語幹の *opt.* として理解する方が自然であろう。そして(14)の例に見られるような、*sa(m) miñj-* と *iñj-* との関係がここで注目される。(14)では *sammīñjeti* に続けて *iñjana-* n. 「動き」が用いられている。*iñjana-* は *sammīñjeti* と一致する形であるが、語源としては *rj-* に由来する語である。*rj-* はパーリ語において、*pres. iñja-ti* 「動く、おののく vi.」、*caus. iñjaya/iñje-ti* 「(体毛を) 動かす、逆立てる vt.」として用いられる<sup>62</sup>。*sa(m) miñj-* と *iñj-*<sup>63</sup> は語形の点で一致し、身体の動きを表すという意味の点でも近い関係にあると考えられる。従って、*sa(m) miñj-* は *iñj-* に再分析され、*caus. sa(m) miñjaya-/sa(m) miñje-ti* が vt. の意味を表す語幹として用いられたと考えられる<sup>64</sup>。

## ・まとめ

*añc-* 「曲げる」、「(水を) 汲む」に関連する語をパーリ語経律の範囲内で考察した。パーリ語 *añca-ti* は *añcha-ti* と揺れ、「引く、引っ張る」の意味を表す。さらに、*samañca-ti* は「引き伸ばす」の意味を表していた。*samañcopi*, *samañco pi* の読みは *samadhosi* や *samacopi* などと揺れているが、どれも寝台に横たわっている身体を起こす状況を描いている。*sa(m) miñj-* は「(腕を) 曲げる」を意味し、常に *pasāraya-/pasāre-ti* 「伸ばす」とともに用いられている。語源について、これまでしばしば考察されてきたが、*pasāraya-/pasāre-ti* とともに用いられる点や音韻、異読の点から、Oldenberg (1881 = 1967 : 1172) の言うように、*sam añc-* に由来する語であることを指摘した。

## 略号と参考文献

### 一次文献

パーリ語文献は Pāli Text Society 版により、略号は CPD に従った。

AṣṣP = Vaidya, P. L. 1960. *Aṣṣasāhasrikā Prajñāpāramitā with Haribhadra's Commentary*

- Called *Aloka*, (Buddhist Sanskrit Texts, no.4). Darbhanga : The Mithila Institute.  
Be = Dhamma Giri Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM Version 3. 1999.  
Ce = Buddha Jayanti Tripiṭaka Series. Colombo. 1959–.  
JB = Raghu, Vira and Lokesh Chandra. 1954. *Jaiminīya-Brāhmaṇa of the Sāmaveda*, (Sarascati-Vihara-Series 31). Nagpur (reprint, Delhi : Motilal Banarsidass).  
MBh = Sukthankar, Vishnu S., et al. 1933–1966. *The Mahābhārata*. Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute.  
ŚB = Werber, Albrecht. 1849. *The Ṣatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandīna-Ṣākhā with extracts from the commentaries of Śāyana, Harisvāmin and Dvivedaganga*. Berlin London.

## 二次文献

- Berger, Hermann. 1955. *Zwei Probleme der mittelindischen Lautlehre*. München : Kommission bei J. Kitzinger.  
PW = Böhlingk, Otto and Rudolph Roth. 1855–1875. *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 vols.. St. Petersburg (reprint, 2000, Delhi : Motilal Banarsidass).  
Cone, Margaret. 2001. *A Dictionary of Pāli, Part I a-kh*. Oxford : The Pali Text Society.  
PED = Davids, T. W. Rhys and William Stede (eds.). 1921–1925. *Pali-English Dictionary*. London : Pali Text Society.  
BHSD = Edgerton, Franklin. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Vol. 2 : Dictionary. New Haven : Yale University Press.  
Eggeling, Julius. 1897. *The Satapatha-Brāhmaṇa : according to the text of the Mādhyandīna school, part 4* (The Sacred Books of East, vol.43). Oxford : Clarendon Press.  
Geiger, Wilhelm. 1916. *Pali Literatur und Sprache*. Strassburg : K. J. Trübner (translated into English by Batakrishna Ghosh, revised and edited by K. R. Norman, *A Pāli Grammar*, 2000, Oxford : Pali Text Society).  
———. 1938. *A Grammar of the Sinhalese Language*. Colombo (reprint, 1995, New Delhi : Asian Educational Services).  
Gotō, Toshifumi. 1987. *Die "I. Präsenstklasse" im Vedischen : Untersuchung der Vollstufigen Thematischen Wurzelpräsentia*. Wien : Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.  
Haebler, Claus. 1968. Pā. *īñjati*, buddh. h. Skt. *īñjate* ; Ved. *īñjáte*, ein mittelindisch-vedische Isoplexe. In J. C. Heersterman, G. H. Schokker, and V. I. Subramoniam (eds.), *Pratidānam : Indian, Iranian and Indo-European studies presented to Franciscus Bernardus Jacobus Kuiper on his sixtieth birthday*, 283–298. The Hague, Paris : Mouton.  
Hinüber, Oskar von. 2001. *Das ältere Mittelindische im Überblick*, 2., erweiterte Auflage. Wien : Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.  
Hoffmann, Karl. 1965. Materialien zum altindischen Verbum : 1. *añc* 'schöpfen', 2. *chand*, 3. *du*, 4. *path*, 5. *mreḍ*, 6. *édhate*, 7. VS. *dīṣya*, 8. AB. *purāṇi*, 9. 2. Sg. *abhinās*, 10. JB. *lilyur*. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* (begründet von Adalbert Kuhn) 79 :

- 171–191. (= *Aufsätze zur Indoiranistik*, ed. Johanna Narten, vol. 1, 1975, 162–182, Wiesbaden : DR. Ludwig Reichert Verlag).
- Johnston, E. H. 1931. Notes on Some Pali Words. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. No.3 : 565–592.
- Leumann, Ernst. 1903. Die Ligatur *mh* in der Kharoṣṭhī-Handschrift des Dhammapada. *Album-Kern : Opstellen geschreven ter eere van Dr. H. Kern hem aangeboden door vrienden en leerlingen op zijn zeventigsten verjaardag den VI. April MDCCCIII*. 391–395. Leiden (= *Kleine Schriften*, ed. Nalini Balbir, 1998, 454–458, Stuttgart : Franz Steiner).
- Leumann, Manu. 1940. Zur Stammbildung der Verben im Indischen. *Indogermanische Forschungen* 57 : 205–238.
- EWAia = Mayrhofer, Manfred. 1992–2001. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*. 3 vols. Heidelberg : Carl Winter Universitätsverlag.
- Narten, Johanna. 1964. *Die sigmatischen Aoriste im Veda*. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- Norman, Kenneth R. 1992. The nasalisation of vowels in Middle Indo-Aryan. *Philosophy, Grammar and Indology (Essays in Honour of Professor Gustav Roth)*, 331–338. Delhi (= *Collected Papers*, vol. V, 1994, 107–118, Oxford : Pali Text Society).
- Oberlies, Thomas. 2001. *Pāli. A Grammar of the Language of the Theravāda Tipiṭaka*. Berlin, New York : Walter de Gruyter.
- Oldenberg, Hermann. 1881. Bemerkungen zur Pāli-Grammatik. *Kuhns Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen* 25 : 314–327 (= *Kleine Schriften*, ed. Klaus L. Janert, vol.2, 1967, 1162–1175, Wiesbaden : Franz Steiner Verlag).
- Thomas, E. J. 1937. Spontaneous Nasalization. *The Indian Historical Quarterly*. 13.3 : 498–502.
- CPD = Trenckner, Wilhelm, et al. 1924–2011. *A Critical Pāli Dictionary*. 3 vols. Copenhagen and Bristol : The Pali Text Society.
- Tucker, Elizabeth. 2002. RV *ṛgmīn-*, *ṛgmīya-* and *ṛñjate*. *Historische Sprachforschung* 115.2 : 274–300.
- 岩井昌悟. 2008. 「あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばし、伸ばした臂を曲げるように – 神變のイメージの變遷を追う –」. 『東洋学論叢』 33 : 131–68.
- 藤田宏達. 1975. 『梵文和訳 無量寿經・阿弥陀經』. 京都 : 法藏館.

## 註

- 1 ヴェーダ文献における *ānc-* について Hoffmann (1965 = 1975), Gotō (1987 : 90–92) を参照。
- 2 この動詞の語幹には問題がある。後に考察するため、以下ではひとまずこのように表記する。
- 3 V.II. “*āncāmi B, añchāmi A, aññāmi C*”. Th-a III 28 *añchāmī ti ākaḍḍhāmi*. Be, Ce *añchāmi*.

- 4 註釈 Th-a III 28 は *kilesapāsaṃ* 「煩惱という罣」と説明する。
- 5 V.l. p.532 “*añj- ABD. acch- Ma (añch- EMbO, cf. añch' āyāme Dhātumañj. v. 12, Sanskrit añch-, āchi āyāme Westergaard's Rad. p.347)*”.
- 6 Fn. 6 “Se Bm K Col Mt *añch°* throughout ; K (note) *añjanto ti pi acchanto ti pi pāṭho* ; Sdt *añj°* (but comp. Jāt 1.192. last lines). The sanna, p.12, explains *ḍṛgha mahat bhāṇḍayan liyana kala dingu kirīmen dik koṭa adane*”.
- 7 EWAia (jüngere Sprache, s.v.). PW によれば、文法書 (Dhātupāṭha, Siddhānta-kaumudī, Vopadeva's Grammatik) と医学書 (Suśruta) に現れる。
- 8 しかし、EWAia は「曲げる」、「汲む」のそれぞれを別語源とする。
- 9 Ja-a I 417 *pacamānā ti tāpayamānā pṭṭayamānā yaṃ yaṃ khāditukāmā hoti taṃ taṃ pacamānā*. 「熱している時、押しつぶしている時、それぞれを嘔もうとする者となる、そのそれぞれを調理している時」。
- 10 Ja-a I 417 *udañcanī cāṭito vā kūpato vā udakaṃ ussiñcanaghaṭikāy' etaṃ nāmaṃ. sā pana udañcanī viya udakaṃ viya ghaṭikā yen' athikā hoti taṃ taṃ ākaḍḍhati yevā ti atho*. 「水汲み容器、容器から、或いは穴から水をそそぐ器にその名称がある。けれども彼女は水汲み容器のように、即ち器が水を〔すくい出す〕ように、それによって求める者となる、他ならぬそれをすくい出すという意味である」。
- 11 Gotō (1987:90-92) を参照。
- 12 Fn. 6 “B 1-2 *samadhosi* always ; B 1 *samidhosi here only*” . Be *samadhosi* ; Ce *samañcosi*.
- 13 Fn. 7 “S 1 *samañcosi here only*”.
- 14 Fn. 8 “M. Ph. *samadhosi*” . Be *samadhosi* ; Ce *samañcosi*.
- 15 Fn. 24 “B. *samadhosī* ; T. is spoiled” . Be *samadhosi*.
- 16 Fn. 1 “So B ; S 1 *samañcopi*, S 3 *samavopi* (S. p.125, n.2)” . Be *samadhosi* ; Ce *samañcosi*.
- 17 Fn. 2 “S 1-3 have distinctly *samañcopi here and further on*” . Be *samadhosi* ; Ce *samañcosi*.
- 18 在証されるものは *dhūṣ-* だが、これについては Narten (1964:154) を参照。
- 19 EWAia (jüngere Sprache, s.v.). PW によれば、Dhātupāṭha, Mahābhārata に用例がある。
- 20 Fn. 5 “F. text, B, C, C 1 *samadhosi* (but at A. iv, 46, *samañcopi*, where Comy. dows not notice) ; S. text, A, G. *mañcena samañcosi* (v.l. *mañcake samañcopi*) ; see Pāli Dict. s.v. *sañcopati*” . Be Be *samadhosī*.
- 21 Fn. 6 “C, C 1 *adhosi*” . Be *adhosi*.
- 22 Fn. 7 “B. *vuttaṃ*” . Be *vuttaṃ*.
- 23 *yuttaṃ* (< *yukta-*) 「結びつけられた」では意味が取れないため、異読 *vuttaṃ* (→注 22, < *ukta-*) を採用した。
- 24 V.l. p.363 “*sammañcamāno, sammañcasi C.*” . Be *samañchamāno, samañchasi* ; Ce *samañjamāno, samañjasi*.

- 25 Fn. 2 “Bp. ° *chaviṃ*”.
- 26 漢訳も含めたこの比喩の詳しい用例は岩井（2008）にあげられている。
- 27 Fn. 2 “Bm throughout *samiñj*”.
- 28 Fn. 1 “Bp *sammīñcitaṃ*”.
- 29 Fn. 3 “So Sk Si ; Bm *samiñjitaṃ*, as Vol.I 168. Cf. I Dīgha 222 & I Sum. Vil. 196”.
- 30 Fn. 6 “In this very often repeated and well-known passage, B has always *samañchitaṃ* . . . *samañcheyya* (which I think to be the true reading)”.
- 31 Fn. 7 “B 2 *samiñjitaṃ* . . . *samiñjeyya* ; B 1 *samañchitaṃ* . . . *samañcheyya*”.
- 32 Fn. 8 “B 1-2 *samañch*”.
- 33 Fn. 9 “B 1 *samañchitaṃ* B 1 *samachitaṃ*”. Fn. 11 “B 1-2 *samañcheyya*”.
- 34 Fn. 9 “B 1-2 *samañchitaṃ*”. Fn. 10 “B 1-2 *samañcheyya*”.
- 35 Fn. 4 “B 1-2 *samañchitaṃ -cheyya*”.
- 36 Fn. 6 “B 1 *samiñj*° B 2 *samañch*”.
- 37 Fn. 1 “B. K. *samiñjitaṃ*”.
- 38 Fn. 3 “M. Ph. M 7 *sami*° throughout ; T. *sammijitaṃ*”.
- 39 Fn. 15 “M. Ph. *sami*° throughout”.
- 40 Fn. 10 “M. Ph. *sami*° ; M 8 *samu*°”. Fn. 11 “M. Ph. M 8 *sami*° throughout”.
- 41 Fn. 7 “M. Ph. M 8 *sami*°”. Fn. 8 “M. Ph. *sami*°”.
- 42 Fn. 2 “M. Ph. *sami*°”. Fn. 3 M. Ph. M 8 *sami*°”.
- 43 Fn. 5 “M. M 8 *sami*° ; Ph. *sami*° corr. from *sammi*°”. Fn. 6 M. Ph. M 8 *sami*°”.
- 44 Fn. 4 “A *samiñc*°”.
- 45 Fn. 2 “B 1 *samiñjana*° ; B 2 *samañchana*° both always”.
- 46 *sati* (as-, pres.pt.loc.sg.) は *hatthesu* 等と数が合わないが<sup>5</sup>、註釈では次のように説明される。Spk III 5 *hatthesu bhikkhave satī ti hatthesu vijjamānesu*.
- 47 Fn. 2 “Cb *sammīceti*, Bm *samiñjeti*, Bi *samiñceti*”.
- 48 Fn. 2 “B. K. *yathā samiñjare bhikkhu* (? *bāhu*)”.
- 49 Fn. 13 “*samiñjaye*, M. ; ° *āye*, D. E. ; *samiñcaye*, B. P. ; *samiñjeyya*, C. ; cp. *Sumaṅgala-Vilāsinī* I. p.196”.
- 50 Fn. 6 “Bm *samiñjite*”.
- 51 Fn. 2 “So Sky Si”.
- 52 Fn. 5 “B 1-2 *samañchite* ; B 2 *samañjite*”.
- 53 Fn. 4 “B 1-2 *samañchite*”.
- 54 Fn. 9 “M. Ph. *samiñcite*”.
- 55 V.l. p.533 “*samiñj-* AZZ always with a single exception, also Lal. Vist. p.297 (*samiñj-* O, M constantly, as well as other Burmese MSS., with rare exceptions, as Jāt. ii, p.380 ; the form is corrupted from *sam-añc-*, cf. Oldenberg, Kuhn’s Zeitschr. XXV, p.324)”.
- 56 Johnston (1931 : 575–577), CPD (s.v. “*ummaṅga*”), 藤田 (1975) を参照。BHS *unmiñjita-*, *nimiñjita-* の一例を示す。AṣP 133 (4 x, 134, 5 x) *punar aparāṃ subhūte tathāgata imāṃ praññāpāramitāṃ āgāmya +aprameyañāṃ samkhyeyānāṃ parasattvānāṃ*

*parapudgalānām unmiñjitanimiñjitāni yathābhūtaṃ prajānāti.*「また他に、スプーティよ、如来はこの般若波羅蜜に到達して後、測り得ず、数えきれない他の衆生達、他の人々の浮き沈みしている〔心〕を如実に理解する」。 *ud-majji-, ni-majji-* のこのような対比は MBh に見られる言い回しと一致するものである。例として、MBh 11.3.15 *yathā ca salīle rājan kīḍāṛtham anusamṅcaran / unmajjēc ca nimajjēc ca kiṃcit sattvaṃ narādhipaḥ*「水の中で、王よ、戯れを目的として従っている者が、浮き、沈むように、ある生き物は、人々の守護者よ」；11.3.16 *evaṃ saṃsāragahanād unmajjananimajjanāt / karmabhogena badhyantaḥ kliṣyante ye 'lpabuddhayaḥ*!!「同様である、輪廻の深みの故に、浮き沈みの故に。行為の享受物によって縛られながら、苦しむ、即ち知恵の少ない者達は」。

- 57 Geiger (1916 : §18. 2), Hinüber (2001 : §157), Oberlies (2001 : §7. 11) を参照。
- 58 Geiger (1916 : §61. 1) を参照。
- 59 鼻音化について、Geiger (1916 : §6. 3, note 6), Thomas (1937 : 498 f.), Berger (1955 : 65 f.), Norman (1992 = 1994), Hinüber (2001 : §113), Oberlies (2001 : 23 f.) などを参照。さらに、シンハラ語の鼻音化については Geiger (1938 : §71) を参照。
- 60 なお、Be は A III 374 *sammīñjitaṃ, sammīñjeyya*, Vin I 183, 214, 291 *sammīñjitaṃ, II 302 sammīñjeyya* 以外、全て *samiñj-* である。Ce は D II 50, 240, 253 f., 264 *samiñjitaṃ, sammīñjeyya*, 181 *samiñjeyya*, Mil 378 *samiñjite* 以外、全て *sammīñj-* である。
- 61 パーリ語では *-aya-* > *-e-* の音韻変化が起きる (Geiger 1916 : §26. 1, Oberlies 2001 : §11. 4)。
- 62 *ṛj-* について、Haebler (1968), Tacker (2002) を参照。
- 63 Pā. *saṃ-iñja-ti* の例は次のものである。Dhp 81 (= Mil 386 v) *selo yathā ekaghano vātena na samīratī / evaṃ nindāpasamāsū na samījanti pañḍitā*!!「岩の一塊が風によっても動かないように、同様に、非難と称讃との中で、賢者は動かない」。
- 64 一方、Berger (1955 : 46) は過去分詞 *-ita-* (*sammīñjita-*) を介した類推 (これについて詳しくは Leumann 1940 を参照) によって *-aya-*, *-e-* 語幹が作られたと述べる。